

# 学校推薦型選抜（文学部）

## 小論文課題

令和四年十二月十日

一〇時〇〇分～一二時〇〇分

### 注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この冊子の本文は全部で五頁です。落丁、乱丁、印刷不鮮の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答用紙は、課題（一）用が三枚、課題（二）用が三枚の計六枚あります。解答用紙の指定欄に受験番号（二箇所）、氏名を記入しなさい。
- 四、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
- 五、解答用紙は縦書きにして使用しなさい。
- 六、草稿用紙が足りなくなった場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 七、解答用紙、問題冊子は持ち帰ってはいけません（草稿用紙は持ち帰ってください）。

次の文章を読んで、下記の課題（一）（二）に答えなさい。

差別問題は、問題のありかを求めて突き進めば進むほど居心地の悪いものである。そこには、「仕方ない」という呟きがいつも耳元で唸りを上げている。解決に一步近づいたと思えば、いつでも欺瞞のさらなる拡大でしかない。

もう一つの居心地の悪さをここで覚えて開示しておこう。それは、差別論関係の専門家の論文や著作が共通に有する色合いであるが、差別撤廃を疑いのない「公理」と前提し、現実がその公理からいかに偏向しているか、われわれ人間の心の貧しさ・残酷さ・冷たさ・軽薄さ・狡さを徹底的に告発するものである。こういう色合いの文章に出会うと、その颯爽とした正義観に戸惑いを覚え、じつのところはなはだ居心地が悪くなる。

差別のない社会を実現することに異存はない。しかし、それに勤しむあまりに、人間の心のうちに潜む「悪」を一律になぎ倒そうとしてはいけないか？ 他人に対する不快、嫌悪、軽蔑などの感情を人間の心から徹底的に追放することが、果たして目指されるべきことなのか？ こうした根本的疑問がぐつぐつ湧いてくるのである。

あらゆる悪意が完全に消滅した社会を想像してみよう。その社会においては、すべての人が他人を思いやり、その人格を尊敬し、他人に心からの愛を注ぎ、……いじめはまったく起こらず、他人に対する言葉の暴力はまったくなく、他人に対して不当に不快を（表明することがないのはもちろん）感ずることさえもなく、他人を不当に軽蔑することも嫌うこともない。こうした社会の到来は非現実的であるから文字通りの杞憂であるが、それはじつに恐ろしい社会、味気ない社会、居心地の悪い社会ではないだろうか？

私の疑問は、「心」に限定される。制度上の差別は撤廃してしかるべきであろう。差別的発言も（少なくとも）制限されるべきである。しかし、差別撲滅運動が人間の心に潜む悪意まで徹底的に刈り込むことを目標にするのだとしたら、誰もが差別感情を抱かなくなることを到達点とみなすのだとすれば、直感的にそれは違うのではないかと思う。

われわれがある人に対して（ゆえなく）不快を覚え、ある人を（ゆえなく）嫌悪し、軽蔑し、ある人に（ゆえなく）恐怖を覚え、自分を誇り、自分の帰属する人間集団を誇り、優越感に浸る……という差別的感情は、——誤解されることを承知で言い切れば——人間存在の豊かさの宝庫なのである。こういう悪がすっかり心のうちから消え去った人間集団を考えてみよう。そこにおいては、哲学も文学も演劇も、すなわちあらゆる「文化」は消滅するのである。

とはいえ、私はそれほど単純でも愚かでもない。全体にとって豊かになるからといって、現に被害者は生息しており、死の瀬戸際まで追い詰められている。そんな状況から眼を逸らせて、のほほんとして人間の悪意は豊かさのために必要だ」と提唱するほどオメデタクはない。ここには、容易に綴じ合わせることでできない深い亀裂が走っている。われわれは悪の魅力・豊かさ・必要性和その暴力性・殺戮性の両面に正確に視線を注がねばならないのだ。悪は、人間を場合によって生きいきとさせ、場合によって滅ぼすのである。

差別は、われわれ人間の中の悪意に基づく。(二)だが、だからといってわれわれの心に住まう悪意をことごとく消去すべきなのだろうか？ これまであらゆる宗教家はそう教えてきたし、哲学者の中にもそう説いてきた者が少なくない。(中略)

われわれは他人を騙し、貶め、他人に危害を加え、破滅させる。純粹に(さまざまな意味で)気に入らない他人に禍をもたらそうと企む場合もある。正義を全うするため、国家や家族を守るため、などの美名のもとにそうする場合もある。復讐の場合もあり、自分の身や地位を守る場合もある。

外形的に他人に危害を加える行為のうち、動機によって正しい行為と誤った行為とを区別することは有効ではないであろう。理念的には分けられるであろうが、現実的には外形的に他人に危害を加える行為の内的動機を抉り出すことは虚しいであろう。当人にも不明な要因が残るであろう。ありとあらゆる動機によって、われわれは他人に危害を加える存在者なのだ。他人を苦しめようとし、その苦しみを喜び、他人を破滅させようとし、その破滅を祝う存在者なのである。

フロイトは『文化における不安』において、こうした「攻撃衝動」をエロスと並ぶ人間存在の自然本性とみなした。子供は攻撃することが禁じられている権威(例えば父親)を「同一化」を経て自己の中に取り入れることによって、困難な状況から脱する。そして、ここに「罪責感」が生まれるのである。よって、人間は攻撃衝動を抑える代わりに、生涯を通じて罪責感と闘い続ける。「文化」は、自他を攻撃し破壊し、他人を排除し抹殺し、他人に嘘をつき騙したぶらかし利用するところに、ある集団を尊敬し別の集団を軽蔑するところに成立するのである。

この線上に動物行動学者のK・ローレンツや、精神病理学者のA・ストーが位置する。ローレンツは、人間のみが文化を有するが、それを人間のみが「種内攻撃」をすることで求める。地上の動物が「高級」になればなるほど、集団や個体の差異に敏感になり、ある集団や個体を好み、別の集団や個体を嫌うのである。ある集団や個体は味方であり、ある集団や個体は敵なのだ。こうした濃淡のある差異の体系が形成されるところに文化は芽生え生育するのである。言い換えれば、いかなる敵も存在しないところには、いかなる味方も存在しないのだから、一致団結して敵に立ち向かい味方を守るといふ勇敢な行為、集団のために自分を犠牲にするという感動的な行為も消え去る。友情も恋愛も家族愛も……それを妬み破壊しようとする敵がいてこそ大切な絆なのである。(中略)

こうした攻撃心を、動物行動学や精神病理学の成果から無批判的に受容し肯定するのは危険であろう。しかし、これを無批判的に排除し否定するのもやはり危険なのだ。差別感情というテーマにおいて、われわれのうちに否定しようもなく認められるこうした広い意味での攻撃Ⅱ悪意を一掃することを目標にしてはならない、とは言えるであろう。

あらゆる悪意とその発露が根絶された理想社会を掲げて現状を嘆くのではなく、自他の心に住まう悪意と闘い続けること、その暴走を許さずそれをしっかり制御すること、こうした努力のうちにこそ生きる価値を見つければいいのだ。人間の悪意を一律に抹殺すること

を目標にしてはならない。誤解を恐れずに言えば、悪意のうちにこそ人生の豊かさがある。それをいかに対処するかがその人の価値を決めるのである。

自分のうちに潜む攻撃心を圧殺してはならないということは、それを容認することではなく、ましてそれをそのまま肯定することではない。われわれは、むしろ差別感情に伴う攻撃心や悪意を保持したまま、自己を正当化することが多い。ここに、剥き出しの攻撃心や悪意よりはるかに悪質な、巧妙に隠された攻撃心が育っていく。ここには、差別をしていないと言いながら紛れもない差別をしているという狡さが悪臭を放っている。

人間はさまざまな場面で狡いが、差別問題はこれが露出する場面である。そのうち最たるものは、「区別があるのであって差別はない」という主張であろう。これは、必ず差別をしている者の側から発せられる。

性差別に関して中河伸俊は、(もって回った言い方だが)次のように語っている。

そして、少なくとも「先進産業社会」では、現実の不平等や支配の制度的な根強さとは対照的に、理念のレベルではその要求をめぐる勝負はついていると聞いていいだろう。これは、いいかえれば、近代の物差しをあてて女性／男性関係を測るかぎり、多くの男性は、経済財や地位、権力へのアクセスに有利な制度的アレンジメントにもたれかかっているという意味で、好むと好まざることにかかわらず自分が「足を踏んでいる」側にいると認めざるをえないということである。(渡辺恒夫編『男性学の挑戦』新曜社)

ある区別Dにおいて、現に得をしている側の者は、Dがただの区別であることを——たとえそう確信しても——認めてはならない、という提案である。既存の区別によって結果として利益を得ている者は、負い目をもたねばならない、無理にでもうしろめたい思いをしなければならぬ、という提案である。たまたま障害者に生まれなかったことを「感謝する」のではなく、障害者に対して負い目を抱く態度が必要だということ、たまたま美人に生まれたことに、たまたま秀才に生まれたことに感謝するのではなく、それを真正正銘の負い目として捉えねばならないということである。

あらゆる提案と同じく、その根拠は確固としたものではない。最終的には原理原則、例えば「人間は平等だから」という抽象的原理に基づくのではない。そうではなくて、何度考えても全身で「そう感じられる」というところに行き着く。そして、私はこうした感じの強い人間である。

さまざまな分野で成功している人がいる。その「原因」を尋ねれば、知的・肉体的に恵まれた資質、恵まれた環境、あるいはさまざまな偶然的出会いであることを否定することはできない。たとえ、その相当部分が当人の慧眼や努力に帰するとしても、そうした能力そのものに遺伝形質が参与しているかもしれないのであるから。

その場合、——ここを強調したい——当人が謙虚であるだけでは、このことが提起する問題(人生の理不尽そのものである問題)の解決にはならない。優れた資質をもつ者、あるい

は賞賛すべき業績を上げた人が謙虚であることほど簡単なことはない。彼(女)はすでに多くの人々によって賛美されているのであるから、そのうえ傲慢になる必要がないのである。こうした人々が謙虚であることは、(いわゆる)劣った形質をもつ者、仕事の上で失敗した者、人生において幸運から見放された者が、卑屈にならず、自殺せず、犯罪に走らずに生き抜くことに比べて無限に容易である。

だから、優れた資質をもつ者や仕事上の成功者は、——謙虚になるのはもちろんのこと——そういう「星のもと」に生まれてこなかった膨大な数の人々に対して、とりわけ劣悪な資質のもとに生まれた人々や不運にあえぐ人々に対して負い目をもたねばならない。

もちろん、それが最終的解決にはならない。最終的解決はないかもしれない。だからこそ、その感情から眼を逸らすのではなく、そこに視点を固定して無理にでも自分のうちうごめくさまざまな感情を捉えなおしてみること、こうした態度からこそ差別問題解決の糸口が見えてくるように思われる。

こうした態度は、「自然である」という言葉を因習的・非反省的に使用する態度からの決別と言いなおしてもよい。フツサールの言葉を使えば、各人が自然的態度から「現象学的還元」を遂行して、そこに開かれる新たな世界を見渡すことがここに要求されている。なぜなら、差別問題において「これは、差別ではなく区別だ」と言い張る人は、「自然である」という言葉を因習的・非反省的に使いたくうずうずしているからである。それは男として自然だ、女として不自然だ、中学生として自然だ、日本人として不自然だ……というように。彼はこうした反省を加えない「自然である」という言葉に行き着くことによって、すべての議論を終らせようとする怠惰な「自然主義者」なのである。

彼は、そこに潜む問題をあらためて見なおすことを拒否し、思考を停止させる人である。「結婚するのはあたりまえ、女が子供を産むのは自然」という結論をいつも手にしており、その鈍い刀ですべてをなぎ倒すのだ。

(二) ある人が、差別におけるコンテキストにおいて「あたりまえ」「当然」「自然」という言葉を使用したら用心しなければならない。差別感情の考察において、「子供が学校に行くのはあたりまえ、大人の男が働くのは当然」と真顔で語る人こそ、差別問題を真剣に考えている人にとって最も手ごわい敵である。なぜなら、彼らはまったく自らの脳髓で思考しないで、ただ世間を支配する空気に合わせてマイノリティー(少数派)を裁いているのだから。しかも、そのことに気づかず、気づこうとしないのだから。(中略)

差別に対するとき、最大の敵は「よく考えないこと」である。あらゆる差別はよく考えないこと、すなわち思考の怠惰から発生する。よく考えると、さまざまに複雑に入り組んでいる問題が鮮明に見えてくるのに、よく考えない者にはそれが見えてこない。見えてこないから、そこに問題はないと思ひ込むのだ。こういう怠惰な輩が差別における最大の加害者である。しかも、自分が加害者であるとはつゆ思っていない鈍感きわまりない加害者である。

## 課題

(一) 傍線部(一)「だが、だからといってわれわれの心に住まう悪意をことごとく消去すべきなのだろうか？」について、筆者はどのように考えているか。八〇〇字以内でまとめなさい。

(二) 傍線部(二)「ある人が、差別におけるコンテキストにおいて「あたりまえ」「当然」「自然」という言葉を使用したら用心しなければならぬ。」について、筆者の視点に立って考えるとき、なぜ用心しなければならないのか。社会・歴史における具体例を挙げ、理由を一、〇〇〇字程度で説明しなさい。